

蝉時雨れが知らせる梅雨明けと行動生態

*Passing of the Rainy Season and the Action Habits
that Continuous chorus of cicadas*

岩崎行伸

2012年7月下旬のことである。2、3日猛暑が続き、梅雨明けが近いと見ていたおり、16日、背戸裏山のお山に登ったら、ウグイス（繁殖期のみ）の囀りに代わり、蝉の初鳴きを聴く。

この蝉の鳴き声は、シャシャン・シャシャン・シャシャンと鳴き響くクマゼミと分かった。17日には南方海上に台風7号が発生し、暖気が北上とともに梅雨前線は日本海に押し上げられたことにより、気象庁では東海地方において梅雨明け宣言となり、暑い暑い猛暑入りと蝉時雨れが始まった。この日は例年より一週間ほど早いという。

ところで、蝉はカメムシ目セミ科の昆虫の総称である。カメムシは触ると悪臭をはなつため、子供らには嫌われものであり、蝉もその仲間というと、意外に思われる。5月の連休の頃から発生するハルゼミ（4～6月）もいるが、蝉が鳴き始めると猛暑の夏がきたことを感じさせる。

そのような意味では季節の移り変わりの予告をしてくれる代表的な昆虫ともいえる。真夏には「ジー-ジー-と鳴いて暑さを感じさせる蝉もおいれば、夏の終わりの夕暮れ時に鳴き、もの淋しさをかきたてる蝉もいる。種々の蝉がいる地球の自然環境は豊かであるといえよう。



アブラゼミ（ジリジリジリ、7～9月）とニィニィゼミ（チィチィチィー、6～8月）は略1日中鳴くが、街灯の点灯による明るい場所だと日が暮れてからも鳴く。ヒグラシ（6～9月、カナカナカナ）は明け方と日暮れ時になると鳴き始める。クマゼミ（7～9月）とミンミンゼミ（ミンミンミン、7～9月）は朝から午前中に鳴き午後には鳴かない。ツクツクボウシ（ツクツクオ-シツクツクオ-シ、7～10月）は午前中と夕方によく鳴き始める。



特に、暑い日が続く真夏の森林や竹林を歩いていると、木の幹や葉かげに蟬の抜け殻がしがみついているのを観察されることがある。

地上に出た蟬は樹液等を吸いながら暮らし、4～5日経つと、♂は鳴いて♀と交尾して一生を終える。よく知られているように、蟬は成虫の時期が極く短く、卵から羽化に至る期間が長い。

蟬の種により異なるが、ツクツクボウシでは3年ほど、ニィニィゼミでは4年、アブラゼミになると6～7年も土の中で暮らししているという。交尾後、♀は産卵管を枯れ枝等に突き刺して卵を産み、卵は翌年の梅雨期孵化。孵化した幼虫は地上に落ち、土の中に潜る。梅雨時や雨の多い秋に孵化するのは、土が湿って柔らかくなるからといわれている。蟬の幼虫は、土の中で木の根から汁を吸いながら脱皮を繰り返し成長している。

蟬は種類により生活環境が異なるため、身近にどの種の抜け殻があるか観察することで、その種の勢力の生活環境等を知る手懸りとなる。

参考文献

1) 自然大博物館（1992）：昆虫、小学館、相賀徹夫編著

添付資料

- 1) 背戸裏山の生き物たち（蟬-Ⅰ）、A：ハルゼミ、B：クマゼミ、C：アブラゼミ
- 2) 背戸裏山の生き物たち（蟬-Ⅱ）、D：ニィニィゼミ、E：ツクツクボウシ、F：ミンミンゼミ